

E

L

L

Vol.16



▲気品あふれる漆芸品。この光沢が多くのファンを魅了している

物心ついたころから、兆春さんにとつて父・光民さんはすでに蒔絵師（まきえし）金粉や貝の粉などを使って漆工芸品を美しく装飾する工芸師）でした。「チリや木コリが舞うから」という理由で、子どもたちは仕事場に入ることは禁止でした。我が子といえども、直接、漆や蒔絵を教えてくれることはありません。唯一仕事場に入れる時間帯は、食事の前に「父ちゃん」「飯だよ」と呼びに行くと

き。兆春さんは、仕事場にそつと入つていって、仕事をしているところや、作品を見て、自分なりに「蒔絵の仕事はこういうものだ」と理解しました。

光民さんの姿で覚えているのは、蔵の二階で、夜中の2時、3時」

るまで黙々と仕事をしている横顔。

た。「親父は夜、仕事場で寝ていま

す。」

弟たちも、黙々と蒔絵を仕上げていました。現在は最低賃金制度があるため、工房で働けば給料が出ますが、当時は給料制ではありません。弟子たちは全員が親からの仕送りで生活していました。

自分で弁当を持ってきて工房で作業をし、師匠の技を目で見て、そして実際にやってみて、習得してきました。「師匠は、益と正月だけ、弟子たちに小遣いをあげ、下駄を買ってやるのが通例」だったそうです。実際に光民さんも弟子入り時代は同じ道を経験しました。光民さんの弟子たちも、辛抱強く師匠の手伝いをしながら技を習得し、やがて独立していく

ました。



▲使えば使うほど光る漆芸品。なめらかな手触りに美しい朱色の光沢。使い込めば使い込むほど味わいができます。折笠うるし工房で出されたお茶の茶托も40年以上使い込まれたものたそつ。

▼古い工具
漆工芸のための古い工具が折笠うるし工房には保存されています。何人もの工人が使った汗がにじんだ工具です。



▲金箔を漆に貼る時には、竹のピンセットで優しく貼ります。数ミクロンの薄い金箔なので、慎重に、丁寧で繊細で注意力の要る作業が求められます。

漆のアートニア

採用と教育研究所
Saiyou to Kyouiku Kenkyujyo

仕事の合間に「ほっ」と一息。働く人の癒しマガジン【癒え～る】

「折笠うるし工房」

○住所：福島県郡山市安積町篠川字北向6-3

○電話・ファックス：024-945-1628

○営業時間：午前10時～午後6時

（来訪の場合には要事前連絡）

朱色にツヤツヤと光り、漆（うるし）と金箔（きんぱく）や金粉、プラチナ粉や青貝など、気品あふれる風合いが特徴の花器や茶托、手鏡が工房にズラリと並んでいます。これらの作品は、会津塗りの手法を元に、オリジナリティの高い独自の乾漆技法「兆春塗」を用いた漆工芸作品を発表し続ける漆工芸家の折笠兆春（光助）さん（78）＝会津若松市出身、郡山市在住、折笠うるし工房代表＝の手によるものです。1981年から日展に25回も入選したのをはじめ、各賞を受賞するなど高い評価を得ています。

漆は縄文時代、傷薬のほか、粟（あわ）や稗（ひえ）と練り合わせて、鎌（やり）等を作る際の接着剤として使われました。

弥生時代には、神仏の器として漆器が使われるなど、歴史的にも

我が国を代表する独自の伝統文化として知られ、漆工芸の技と歴史

は変わることのない価値を伝え続

けています。伝統技術を土台に、

独自の技法を加え、素晴らしい作

品を発表し続けている折笠さんに、

漆工の技と、長い歴史と伝統の継承について伺いました。

兆春さんは1940（昭和15）年2月14日、蒔絵師の父・折笠光民さん（英二さん）の四男として生まれました。自宅は会津若松市の神明通り、まさに街の真ん中。



兄の急逝で

サラリーマンから漆芸の道へ

兆春さんの兄弟は自分も入れて

男6人。「6人いても、蒔絵や漆

に興味のある兄弟、興味のない兄

弟がいるから、面白いですね」

幼い頃は、家業である漆芸の

道へ進むことは考えておらず、高

校を卒業したら就職しようと考え

ていました。ところが、就職試験

を受けようとした中学の先生に相談す

ると、先生から、「家を継がなけ

ればならないのだから、就職はダメだ」といわれました。

「父は私に継がせたいと思って

おり、もしかしたら先生は父の話を

聞いていたのかもしれません」

と振り返る。

進学を決意し、会津工業高校の

漆工(しつこう)科(現在は建築

インテリア科)に進学し、漆を学

びました。高校で漆芸に取り組

むうちに、次第に「この仕事は自

分に合つてゐるな」と実感し始め

たそうです。「ちょうど、高校で

漆を教えてくれた先生は、父の友

達だったんです。そんな関係もあつ

ていました。そこから、就職はダメだ

といわざりません」

「漆芸だけでは妻を養うのは難

しい」と、郡山市の老舗デパート

に就職しました。「このときは、

「漆芸の道には入らない」と思つ

ていました。そこから、就職試験

を受けようとした中学の先生に相談す

ると、先生から、「家を継がなけ

ればならないのだから、就職はダメだ」といわれました。

「父は私に継がせたいと思って

おり、もしかしたら先生は父の話を

聞いていたのかもしれません」

と振り返る。

進学を決意し、会津工業高校の

漆工(しつこう)科(現在は建築

インテリア科)に進学し、漆を学

びました。高校で漆芸に取り組

むうちに、次第に「この仕事は自

分に合つてゐるな」と実感し始め

たそうです。「ちょうど、高校で

漆を教えてくれた先生は、父の友

達だったんです。そんな関係もあつ

ていました。そこから、就職はダメだ

といわざりません」

「漆芸だけでは妻を養うのは難

しい」と、郡山市の老舗デパート

に就職しました。「このときは、

「漆芸の道には入らない」と思つ

ていました。そこから、就職試験

を受けようとした中学の先生に相談す

ると、先生から、「家を継がなけ

ればならないのだから、就職はダメだ」といわれました。

乾漆(かんしつ)技法と

『兆春塗』の特徴



40代前半頃の折笠さん=工房で

会に出品する予定の作品は、形が

決まるまでに半年位かかるのが通

常。

「デザインの部分に非常に時間がかかりります。デザインは、自分のオリジナルのもので他人の真似ができませんから。自分独特で、

と、「夫唱婦隨」で作品の展示や販売をサポートし続けている奥さんは、当時のことを振り返り、「う笑います。

「さあ、この人が言つてくれたこ

とは、実際にはどうだったと思いま

す?」

折笠さんと見つめ合う奥さんの

優しい笑顔が、漆芸の道を夫唱

婦隨で歩んできた充実した日々を

お説いは丁寧に辞退しました。」

工房に入る」とを反対する奥さんはこういって口説いたそうです。

「でも私はやはり漆芸の仕事を準備するから、会津に戻らないから」と熱心に誘ってくれました。

さらに、会津でも有名な漆業の社長が訪ねてきて、「自宅や作業場

を準備するから、会津に戻らない

のか」と熱心に誘ってくれました。

奥さんはとても悩みました。

「漆芸の道には入らない」と思つ

ていたそうです。

デパートでは、呉服販売、外商、企画など、いろいろな職場を経験

しました。かなり忙しく、朝出勤して、帰宅するのは夜中の12時

1時。それでも、120年の歴史を誇るデパートでの仕事はやりがいがあり、充実した毎日でした。

ところが兆春さんに大きな転機

が訪れます。就職して5年目を迎えたころ、家業を継ぐと思われて

いたお兄さんが急逝してしまったのです。そこで急きよ、兆春さんが

が継ぐことになりました。

しかし、ちょうどその頃、銀行

や大手の企業などから、兆春さん

に引き抜きの話が出ていました。

奥さんは「漆芸では食べていけ



技法は、まず、事前にデザイン画を描いたり、発泡スチロールで形を作つたりして、実際の大きさ、形に手を加えたりしたあと、粘土で形を作ります。その後、昭和62年から平成22年の第42回展まで連続入選を果たしています。このほかにも、河北工芸展に22回招待出品し、同展の顧問として活躍。また日本新工芸展にも31回入賞し、審査員も務めました。

郡山市文化団体連絡協議会の文化栄賞(平成12年)、郡山市特別社会教育功劳賞(平成16年)、郡山市文化功劳賞(平成24年)、郡山市文化団体連絡協議会創立60周年記念特別功劳賞(平成26年)、福島県文化スポーツ知事感謝状(平成27年)、郡山市特別表彰(平成28年)、福島県文化功労賞(平成29年)を受賞。優れた技とともに、地域文化芸術活動の発展への貢献が高く評価されました。

「兆春塗」は、乾漆技法で制作され

た漆工品です。乾漆技法は、奈良

の興福寺にある国宝で重要な文化財

であります。「阿修羅像(あしゅらぞう)」が有名です。

技法は、まず、事前にデザイン画を描いたり、発泡スチロールで形を作つたりして、実際の大きさ、形に手を加えたりしたあと、粘土で形を作ります。

その後、昭和62年から平成22年の第42回展まで連続入選を果たしています。このほかにも、河北工芸展に22回招待出品し、同展の顧問として活躍。また日本新工芸展にも31回入賞し、審査員も務めました。

「私の作品は会津塗りではありません。私だけの独自の塗りです」

と答えました。するとその人は、「それならば、『兆春塗』としたのにはきっかけがあります。

あるとき、漆芸に詳しい人から、「折笠さんの作品は、会津塗りですか?それとも会津塗りではないのですか?」と聞かれことがあります。した。それ以後、作品は「兆春塗」と呼ばれるようになりました。

そのとき兆春さんは、「私の作品は会津塗りではありません。私だけの独自の塗りです」と答えていました。するとその人は、「それならば、『兆春塗』としたのにはきっかけがあります。

あるとき、漆芸に詳しい人から、「折笠さんの作品は、会津塗りですか?それとも会津塗りではないのですか?」と聞かれことがあります。した。それ以後、作品は「兆春塗」と呼ばれるようになりました。

そのとき兆春さんは、「私の作品は会津塗りではありません。私だけの独自の塗りです」と答えていました。するとその人は、「それならば、『兆春塗』としたのにはきっかけがあります。

あるとき、漆芸に詳しい人から、「折笠さんの作品は、会津塗りですか?それとも会津塗りではないのですか?」と聞かれありますが、「兆春塗」と呼ばれるようになりました。

そのとき兆春さんは、「私の作品は会津塗りではありません。私だけの独自の塗りです」と答えていました。するとその人は、「それならば、『兆春塗』としたのにはきっかけがあります。

あるとき、漆芸に詳しい人から、「折笠さんの作品は、会津塗りですか?それとも会津塗りではないのですか?」と聞かれありますが、「兆春塗」と呼ばれるようになりました。

そのとき兆春さんは、「私の作品は会津塗りではありません。私だけの独自の塗りです」と答えていました。するとその人は、「それならば、『兆春塗』としたのにはきっかけがあります。

あるとき、漆芸に詳しい人から、「折笠さんの作品は、会津塗りですか?それとも会津塗りではないのですか?」と聞かれますが、「兆春塗」と呼ばれるようになりました。

しかも創作性の高いものを作らなければいけないわけです。「ここに手間も時間もかけていきますが、このデザインの部分が一番楽しく、やりがいがあります。その後の工程に入れば、どんどん進んでいきます」と、兆春さんは微笑みながら話してくれました。

もう一つ繊細な作業が、研ぎ出しど、磨き上げ。独特の柔らかな光沢を出す最後の仕上げの作業で、最低でも2ヶ月ぐらいの時間をかけます。



「消炭」などで、丁寧に研ぎ出していく。そのうちに中の色が出てきます。研ぎ出すうちに金箔が表に出てきて、金や赤のマーブル模様、自然が描き出す美しい墨流し模様や、まだらの流し絵模様が鮮やかに描き出されます。「一つ一つの工程を手作業で、色々感触を確かめながら進めていきます。最近は大量生産するために、機械で仕上げしたものが出来て、そのような製品ではほとんど艶(つや)は出ませんし、使っているうちに艶が消えてしまうものもあります。ですが、私の作品は、使っているうちにどんどん艶が出てくるのが特徴です。」

漆製品は、温度や乾燥に弱い、繊細さがあります。電子レンジや食洗機など、温度が上がる家電製品などでは、温度が上がるうちに艶が出てくることがあります。そのため堅牢で鮮やかといえます。しかし、漆を重ね塗りして、上塗りして、たいへん手入れも済ったふきんということがあります。」「割れてしまうものは、生地に漆を下塗りして、上塗りして、つい1回、もしくは数回で塗りを終えた品です。私の場合は15回から30回と、何度も漆を重ね塗りしています。このために割れることがあります。」

幾重にも丁寧に工程を踏んでおり、そのために堅牢で鮮やかといえ、美と実を兼ね備えたオンラインの品になっています。」

「兆春塗」の作品を花器として使用したことがあつたそうです。来場者の皆さんに鑑賞してもらつた



伝統的な会津塗りの技法を発展させて作り上げた「兆春塗」。伝統を踏まえて、さらに新しいものへと発展させた兆春さんの努力は一朝一夕ではありません。「漆工は非常に歴史が古いもので。こうした歴史のある技法は、見たり聞いたりするだけでなく、自分で実際にやってみて、何度も

ないで根気強く造ることが重要と語る兆春さん。「順序として、まず経験してみると、経験を積んで体験することです。体験と言うのは、体で覚えていくと言う事なんですね。その後に修行の道に入るということ、修めていくということです。それには失敗の繰り返しが重要なんです。そうなるともう、目の前にあるのは目標ですね。それも、高い目標などはもう掲げることができます。それは失敗は逆境に克つ」と言われますけれども、逆境に負けてはいけません。されども、継続していかなければならないですね。実際ににはどの工程も辛いことではありますけれども、どうしないとダメだと、体验してみて、どうしないとダメだと、自分の腕を磨いていくしかないんですね。」

漆が大事にされてきた理由

重要な後継者育成

他の人にも教えます。でもなかなかそういうことは、教わってわかるものではないんです。実際に自分がこのままではいいんです。実際には自分でも、ああしないとダメだと、体验できる哲学を話してくれました。

兆春さんは、なかなかできないですね。芸術は、「その作者が亡くなる寸前には完成したもののが完璧なものだ」といわれますが、日々挑戦し、工夫しながら取り組んでいくものなのでしょう。それは、人格の完成と同じですね。もちろん、技法は

水を入れて花を生け、スポットライトが当たる場所に1週間展示しましたが、花器には変化もなく、全く問題はなかったそうです。「極端な高温や直射日光を避けていただければ、あとは大丈夫。どんどん日常使いをしてください」とアドバイスしているそうです。漆製品は「高額なので、特別の時にだけ使おう」という人が多いのですが、兆春さんや奥さんは相談を受けると、「どんどん使ってください。手入れも済ったふきんで拭くぐらいで大丈夫」と説明しています。ほとんどの人が驚き、そして喜んでくれるそうです。

自ら学び、失敗を繰り返して習得していくのが本当の技

伝統的な会津塗りの技法を発展させて作り上げた「兆春塗」。伝統を踏まえて、さらに新しいものへと発展させた兆春さんの努力は一朝一夕ではありません。「漆工は非常に歴史が古いもので。こうした歴史のある技法は、見たり聞いたりするだけでなく、自分で実際にやってみて、何度も

使うようになつていくのです。」

今、漆工芸の世界では、他の芸術の分野同様に、後継者の育成が課題になつているそうです。「後継者の育成が非常に重要です。この世界を将来につないでいくには、それしかありません。しかし独立していくために技を習得するまでの間は修行の時期。この間は、生活費としての自己資金が必要な場

がら、あきらめずに技能を身につける根気も必要です。」「なんとか、後継者の育成を進めていきたい。漆芸品は、日本の伝統工芸として、海外でも関心があるということ、海外で販売しようという話があります。嬉しい事で

すし、日本の誇りとなるような作品をどんどん海外に送り出していくことを通して政治家や俳優、外国人を通じて大使館、陶芸家等に献呈や献上、郡山市の美術館や文化センター、公民館などに作品を寄贈してきた

兆春さん。美しく高級感あふれる「兆春塗」を、これからもますます、様々な場所や機会に目にすることができるでしょう。

2018年の抱負

最後に2018年の抱負を伺いました。

「今年は未完成のものを完

成させたいと思っています。

実は、50代、60代の頃は、

だめかもしませんね。歳で、

やはり制作には相当の体力が

要りますから。大きい目標よ

りも、今、半端な様態の仕事

を一つ一つ完成させていくと

いうことが大事。その基本を

大事に、今年もますます頑張

りますよ。引き続き、後世に

残る新しい作品に挑戦したい

と思っております。」

謙虚な言葉で今年の目標を語

つていただきました。

- 日展 1981（昭和56）年
以降～25回入選
- 作品「陽炎」「暁」「黃雲」「星の砂」「ひとひらの詩」「こころ豊かに」「天空燐々」「永遠の空」など多数
- 河北工芸展 1992（平成4）年以降22回招待出品
- 日本新工芸展 1980（昭和55年）以降31回入選

[折笠兆春（光助）さん]
プロフィール

1940（昭和15）年
福島県会津若松市生まれ

1958（昭和33）年
会津工業高校漆工科卒業

父・光民氏に師事、現在に至る。

日展会友（震災により退会）

河北工芸展顧問

福島県総合美術展運営委員・招待・審査員

福島県美術家連盟副会長・評議員

福島県南工芸美術会会長

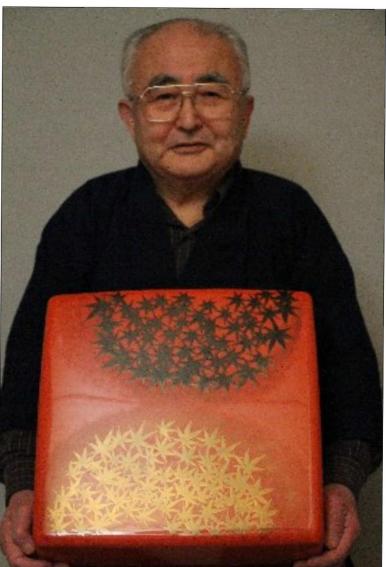
採用と教育研究所

企業、自治体等の採用と教育を手がける。福島の企業を中心に、いい会社を目的に「仁財育成」のサポーターとして定評がある。

笑いが溢れた楽しく役立つ講演は経営者から学生まで幅広く人気で全国を駆け回る。

YELL 16号 発行 / 採用と教育研究所
代表 半田真仁

〒960-8055福島県福島市野田町6-7-8 B103
TEL 024-529-5153 FAX 024-529-5794
E-mail: info@saiyoutokyouiku.com



折笠つるし工房の美しい作品

